# 『夕方、6時半以降の情景』

山口　晴菜

## 1　ベースが入ったブルーのケース

どんよりとした空気と時間が流れる薄暗い小道。にぎやかな大通りから、きらきらしたネオンの光が細く差し込んでいる。人の気配の少ない古いビルが立ち並ぶこの界隈は、間もなく始業時間を迎える。居酒屋の軒先には暖簾がかけられ、学生に人気のショットバーにも明かりが灯る。希美子は黒のスキニージーンズをぴったりと履き、コットンの白いブラウスの上に緑のカーディガンを羽織っている。明るいブルーの天然石で出来たピアスを両耳に一つずつぶら下げ、それらを規則正しく揺らしながら真っ直ぐこの小道に入っていく。この寂れたビル街の中でひときわ目立つ夕焼け色の看板が、目的地の目印だ。上は三階くらい、下は地下一階まである、ごくありふれたこの古いビルのことを、希美子やこの近辺で活動するバンドマンたちは、オレンジタワーと勝手に呼んでいる。慣れた足取りでスタスタと地下への階段を駆け下りる。そして目の前に現れる、お馴染みの重い扉を開ける。長年にわたって蓄積されたタバコの匂いがボワっと香る。更に五歩程度奥に進んだ先のもう一枚の防音扉を開ける。ドリンクカウンター越しにオーナーの姿が見える。希美子に気付くとニッコリ笑って手招きをする。時刻は夕方、6時半。希美子が夜の世界に出発する時間だ。

「オーナーおはようございます。」
希美子は軽く会釈をしてバーカウンターの中に入った。
「希美ちゃん、今日も学校お疲れさん。急に出勤してもらって悪かったね。」
オーナーはハイネケンのロングネック瓶を、氷の入った大きなバケツに差し込んでいるところだった。
「いえ、いいんです。今日は個人的に見に来ようって思ってましたから。」
希美子はドリンクカウンターの奥にある事務所に自分のショルダーバッグを置いた。
「実は俺も、希美ちゃんは休みでも絶対に来るだろうなと思っていたよ。」
オーナーは大きな口を開けて、ガハハハと笑った。この日の出勤が急に決まったことを希美子は喜んでいた。いつにも増して、心は弾んでいたし、仕事に対してもやる気がみなぎっていた。